

「神に似ること」と「動」をめぐる

——プラトン『ティマイオス』と『法律』第十卷から——

土井裕人

はじめに

既に発表した論文「神に似ること」の様相——プラトン『ティマイオス』を中心に——¹⁾では、「神に似ること」(θεοειδής)について、プラトンの宇宙論的著作として知られる『ティマイオス』を中心に検討したが、考察の不十分な部分が残されていた。本論では、「神に似ること」について、その根幹に深く関わる「知と関連した動」という観点に基づいて再考し、プラトンにおける神と人間の関係の様相について考察を試みたい。

そもそも、『ティマイオス』において「神に似ること」とはどのようなことであり、似る対象はどのような神であるのか。本論の前提ともいえるこれらの事柄を確認するため、「神に似ること」に関して最も明確に述べられた箇所を検討して、問題の所在を明らかにしたい。

われわれの中の神的部分と (τῶν ἐν ἡμῶν θεῖον) 同種の

「動」であるのは (συνεχῆς εἶναι κινήσεως)²⁾、万有のなす思考と、その回転運動 (στροφῆς καὶ περιστροφῆς)³⁾ です。そこで、各人は、これらの跡を追いながら、生まれた時にすっかり損なわれてしまった、われわれの頭の中の回転軌道を、万有の調和と回転運動に (τὰς τοῦ ταυτὸς ἀμείωτας τε καὶ περιστροφῆς) 学んで矯正し、こうして、観察する側のものを、観察される側のものに似せて、前者を、その最初の本来の姿に (κατὰ τὴν ἀρχαίαν εἰσῆ) かえさなければなりませんし、また、このようにして似せることによつて、神々から人間に、現在に對しても未来に對しても課せられた、最もよき生をまっとうしなければならぬのです。(Tim. 90C7-D7)

「宇宙はデミウールゴス(制作神)によつて制作された神である」という「ティマイオス」の所論を踏まえれば、神たる宇宙の回転を模倣して人間の魂の回転を立て直すことが「神に似ること」であると理解されよう。しかし、細かく見ると、「神に似ること」の根底に巡

統する論点が幾つも見出される。まず、(1)人間は神的部分(το θεϊόν)を持ち、その「動(kinēsis)」が、万有——宇宙とも言い換えられる——の思考や回転運動と同族であるとされている点が挙げられる。なお、kinēsisは、空間における物体の移動だけではなく生成や変化まで広義に用いられる語であり、「はたらき」の意味も含めた「動」という意味を持つ。次に挙げられるのは、(2)人間の神的部分の「動」が、思考といった「知」——様々な段階があることを前提とした総称としての——と深い関係を持つことである。また、(3)人間の魂の回転軌道は出生時に失調してしまっていること、従って、宇宙の魂の調和と回転運動を模倣して矯正することにより、人間は本来のあり方を恢復しなければならないことも明らかである。

以上の論点からは、魂の神的部分の回転という「動」が、「神に似ること」において重要な位置づけにあることが理解されるが、神的部分の「動」が「知」とどのような関係にあるのか、また、なぜ回転運動が重要なものとして位置づけられているのかを考察することが本論の目的である。まず、「テイマイオス」の展開を追いつながり検討を始めた。

1 「テイマイオス」の「神に似ること」における「動」と「知」

まず、回転という「動」は「テイマイオス」の中でどのように論じられているのだろうか。この「動」が最初に登場するのは、調和的な比率に従って制作された宇宙の魂が「同」の円環と「異」の円環に分割されたことが語られる 3B39B12 であるが、本論にとりわけ関係が深いのは以下の箇所である。ここで論じられているのは、宇

宙の魂による「自分で自分自身に対する (Tim. 37A5)」知的活動であるが、宇宙と人間の魂はヌース (nous 理性・知性) を持つという共通の構造にあるので、人間の魂による知的活動にも当てはまるであろう。

そして、「異なっているもの」についても、「同じであるもの」についても、変らず真にして成立する言論が (Logos … o kratai toutou dialētis tryphētos) ‘自分自身によつて動かされるものの中を (en to kroumēnō)’、声も音もなく運ばれる時、一方それが感覚の対象 (to aisthētōn) にかかわり、「異」の円環が正しく進行して (to toū batērou kōkos ophēs iai) ‘その魂全体に、これを伝える場合には、確實で真なる思いなし (sōfōs)・所信 (to tēs) が生まれ、他方また、言論の対象 (to logotikōs) となるものにかかわり、「同」の円環がなめらかに動いて、これを明らかにする場合には、必然的に、ヌース・知識 (emōrtia) が完成されます。(Tim. 37B3-8)

ここでの要点は、「異」と「同」という円環の「動」として魂の知的活動が論じられていること、先に(2)として挙げたように、回転という「動」が「知」と深く結びついていることである。また、常在の实在を対象とするか流転する感覚的事物を対象とするかという違いに従って、「知」の段階が分けられていることにも留意すべきであろう。こうした「異」と「同」の違いについては、「異」は差異性をはらむ「分割可能 (Tim. 37A5)」なものを対象とするという

理由で多様な感覚対象に関わり、「同」は同一的で「不可分 (Tim. 37A6)」なものを対象とするという理由で自己に對する知としてのヌースに関わると考えられる。

また、「正しく進行」するや「なめらかに動いて」からは、円環による正しい回転運動が正しい知的活動に必要であると解することができる。その証左として、身体についてではあるが、宇宙の「動」が論じられた箇所 (Tim. 34A15) を挙げることでしよう。この箇所では、七つの「動」(回転および前後上下左右)のうち「ヌースや知力にとりわけ深い関係のある「動」として、円を描く回転運動が宇宙に与えられたことと、宇宙が彷彿わないように、回転以外の六つの「動」が取り除かれたことが述べられている。

このように、宇宙の魂が常に行い、人間の魂も本来行う知的活動は、正しい円形の回転としての「動」という観点から捉えることができよう。つまり、回転という「動」は、神たる宇宙の魂や人間の魂の神的部分が持つ正しい「知」と密接なものと考えられる。

では、神である宇宙や本来の人間が行う秩序的な知的活動とは對照的に、「生まれた時にすっかり損なわれてしまった (Tim. 90D12)」人間の知的活動は、「知」と「動」の観点からどのように説明されるのだろうか。この混乱状態は、「不死なる魂の循環軌道 (Tim. 43A45)」すなわち人間の「同」と「異」の円環が、宇宙とは違って死すべき定めのある身体に結びつけられたと混同してしまっている。この結びつけによって、魂は六つの「動」を得て混乱し、無秩序で比率のない「動」が「生きものの全体 (τὸ ζῶον ζῶον Tim. 43A7-B1)」に

もたらされ、さらに、外からもたらされる「感覚 (αἰσθησις)」が加わって魂の混乱は倍加される (Tim. 43B5C6)。そして、これらの影響によって、「およそ円の歪曲・破壊として可能な限りの、ありとあらゆる種類のもの (Tim. 43E15)」が作り出され、魂の構成の際に与えられた調和がねじ曲げられた結果、魂の二つの回転運動は「同」と「異」を正しく判断できなくなり、ヌースに与らない無知な (ἀγνοῦς Tim. 44A8, ἀνόητος Tim. 44A3, 44C3) 状態に人間は陥るのである。この、人間の魂の神的部分が機能しない状態が「神に似ること」の対極にあることはいくまでもないであろう。従って、「知」に関して、無知という「神ならぬ」状態に魂が陥ることは、「動」という観点からは、外来の「動」によって魂の回転運動が混乱することと捉えられる。

それならば、魂の「動」が矯正され「知」が回復していく過程を検討することによって、「神に似ること」は「動」と「知」という点から明らかになると考えられるが、こうした過程はどのように述べられているのだろうか。

しかし、成長と養分の流れの襲来がいくらか衰え、魂の回転軌道がふたたび平静を取り戻して自分自身の道を進み (ἐπιστρέφω ὁδῷ ἑαυτοῦ) 、そして時とともにしだいに安定して来る時、その時にはやがてそれらの回転運動は、それぞれの円が自然に動く時に描く形 (τὸ κατὰ φύσιν ἰσχυρῶς ὀρθῶς ἐκτετατῶν κύκλων) を ἀνεπαίσιμα 正され、「異」を εὖ 「同」を εὖ 正確に呼

ぶことになって、こうして、魂の所有者をして思慮あるもの (εὐφραν) となるようにするのです。(Tim. 4A2-7)

この箇所からは、回転以外の「動」や感覚から魂が悪影響を受けなくなることで、人間の魂の回転運動は元来の進み方である円形に戻っていき、本来の知的活動を回復していくと捉えることができる。もともと、人間の知的活動の混乱も、生まれてしばらくすれば必ずから治るのではないかとも考えられるが、「教育 (ταδεια)」によって「全くもって完全に健全な者 (ἀσθενῆσθε τὴν ταδεια)」になると語られていることから (Tim. 4A8C4)、「無知からの回復には何らかの「能動的」な知的営為が必要といえる。また、「完全な (ἀσθενῆσθε)」や 4C3 の「不完全な (ἀσθενῆσθε)」という語が密儀の用語であることを承認できるならば、無知からの回復が容易ならざること、その回復が特殊な意味合いも帯びていることは明らかである。いずれにせよ、「知」の回復の過程が、様々な動きを得て無秩序に陥った「動」を矯正する過程と軌を一にし、「神に似ること」に連続していることは確かであるといえる。

では、「最大の病」である無知を治療することは、具体的にどのような「神に似ること」とどのように結びついているのか。最初に挙げた「ティマイオス」90C7D7からは、宇宙の回転運動を模倣することで、人間の魂の神的部分による回転運動を矯正し、人間に本来の神的あり方を回復することであると考えられる。しかし、ここで着目するのは、神々が人間に視覚を与えた目的について、「宇

宙の回転運動を模倣することで人間の回転運動の立て直しに資するように」と述べられる箇所のうち、以下の部分である。

しかしじつさいには、昼と夜が見られ、月や年の循環だとか、春分・秋分、夏至・冬至が見られたからこそ、それによって数が案じ出され、また時間の概念と、万有の本性についての探究 (τὴν τῆς τοῦ παντός φύσιν εἰρημύ) がわれわれに与えられたのです。そしてこれらのものから、われわれはすべて愛智と名のつくもの (ἀσθενῆσθε νέως) を手に入れたのですが、これよりも大きな善いものが、死すべき種族に対して神々から贈られて来ることは、かつてもなかったことですし、また未来においてもけつてないことでしょう。(Tim. 47A5-B2)

ここでは、昼と夜という単純な周期の観察に始まって、数や時間の考察、そして愛智に至る、いわば「知の上昇」が示唆されているといえる。「ティマイオス」で度々登場する「似た者同士の原理」に基づくなら、特に、宇宙の魂における「異」の円環が顕現した太陽の運行を人間が観察することは、感覚に関わる「異」の円環を用いてなされると考えられる。また、昼と夜が「単一」で、もともと知的な円環の回転軌道 (Tim. 39C2) すなわち「同」の回転に関わる¹⁾とされていること、また、太陽が宇宙を照らすものとなった理由が「同にして一様なもの」の回転運動から学んで、数を分有するよう²⁾ (Tim. 39B6C1) と述べられていることを考えると、昼と夜の観察は、数の探究によって「同」の回転を識ることを介して、宇宙

による「同」の知的活動の方へ人間を導く端緒になっているといえる。先に述べた、差異性に関わる「異」と同一性に関わる「同」という図式を適用することが許されるならば、差異的な頭れを一つのものとして統合する原理を追究することによって、「多」から「一」へと、人間の「知」はいわば「中心化」していくのであろう。

つまり、諸天体の運行の観察から万有の本性の探究や愛智に至る過程によって、人間の知的活動は宇宙のそれと同様に神的なものとなり、「異」から「同」へと「知」の恢復が行われ、無知に対する治癒がなされると考えられる。これは、神的な「知」に向かつて人間の「知」が本来あるように回帰していくという意味において、「神に似ること」であるといえる。

しかし、「知」の段階を上昇して「同にして一様なもの」を追究することは、どのようにして人間そのものを「神に似せる」のであるのか。先の ANABASIS においては、愛智が「死すべき種族に対する最大の贈り物」と述べられていたことから、「知」と不死性との関わり——もつとも、知的活動を行う宇宙が不死であるからには、人間による宇宙と同様の知的活動が不死に関わるのは当然でもある——が示唆されていた。ここでは、「神に似ること」について、「不死」をキーワードとしながら「ティマイオス」終盤の箇所を検討したい。

そこで、欲情や野心の満足にのみ汲々として、そのようなことのためにのみ勞すること甚しい人にとって、その思いのすべが、死すべきものになってしまうこと、そしてまた、およそ

可能な限り、まったくの、死すべきものになり、その点で少しの不足も残さないことは、……〔中略〕……これは、どうにも避けられないことなのです。しかし、これに反して、学への愛 (ἡ ἀγάπη διὰ λόγον) と、真の知に (ἡ ἐπίστασις ἀληθῆς ἀπορίσκει) 真剣に励んで来た人、自分のうちの何ものにもまして、これらのものを鍛錬して来た人が、もしも真実なるものに触れるなら、その思考の対象が、不死なるもの、神的なものになるということは、おそらくはまったくの必然事なのでしょう。(Tim. 90B6-62)

この箇所からは、人間の「知」が可死的に地上の流転するものに執着すれば、人間も対象同様に死すべきものになり、真の「知」でもって真なるものを捉えるなら、「知」の対象は不死的で神的なものとなる。「およそ人間の分際に許される限りの、最大限の不死性にあずかる (Tim. 90C2-C3)」という、人間にもたらされる結果の「知」の対象に対応した相違が明らかであろう。つまり、人間が神たる宇宙の持つ不死性に与るかどうかは、「知」のありようが左右するのである。では、なぜ神的な「知」が不死的であるのか。これは、「ティマイオス」における宇宙の形象が、円形の「動」を行う球の形として表されていることに関係していると考えられる。つまり、終局を持たず「無限」に行われる回転として表される「知」は、無限の回転がはらむように、永遠で不死的なのである。従って、人間の「知」は正しい回転運動に関わることで神たる宇宙の「知」と同様に不死なるものとなり、こうして人間の指導的部分である神的

魂は本来の不死性を恢復して、人間全体を可能な限り「神に似せて」いくと考えられる。

「ティマイオス」におけるこれまでの考察をまとめると、「神に似ること」とは、「動」の矯正や「知」の恢復によって人間が宇宙という神のあり方に似るだけではなく、「動」が矯正された真の「知」によって不死なる宇宙という神を捉え、宇宙と同様に不死である神的あり方に人間を似せることであるといえる。しかし、「ティマイオス」を考察する限りでは、(a)魂の円環の「動」を矯正することで知の恢復がもたらされるのか、「知」の恢復が魂の「動」の矯正を伴うのかといった「動」と「知」の関係について、また、(b)「知」に関していわれる「動」——特に回転という「動」——の持つ意味があまり明確には示されていないという問題点も残っている。これらの疑問を究明するには、「動」と「知」について論及されている他の著作を加え、さらに考察を進める必要がある。それにあたって相応しいのは、最善の魂である神の存在証明が「動」と「知」という論点から論じられた「法律」第十卷であると考えられる。

2 「法律」第十卷における「動」と「知」

「ティマイオス」も属する後期対話篇の中でも最晩年の著作とされる「法律」は、アテナイからの客人が新たな植民国家の法律立案を委嘱されたクレイニアスの相談を受け、ラケダイモンのメギロスとともに、新国家に制定する様々な法律とその序文を教育・官職・財産制度といった様々な分野にわたって論じる対話篇である。その

中で、拙稿が取り上げる第十卷は不敬虔に対する立法を扱っており、立法の根拠である神を蔑ろにする不敬虔な説に対する反論が展開されている。

では、「法律」第十卷において「知」と「動」はどのような関係にあるのか。具体的な言及は、「神の存在証明」の前提となる「魂の存在証明」が終わったあと、魂が善悪・正邪といった相反するもの原因であるとともに宇宙をも統御していると確認される箇所にある。ここで、アテナイからの客人は、善悪どちらの魂が宇宙を導いているのか結論を得るため、次のようにクレイニアスに同意を求めらる。

アテナイからの客人「いいですが、あなた、もし天と天のなかに存在するすべてのものの軌道や運行全体が、ヌースの「動」や回転や思考と同様な性質のものであつて (von Künzel *krit. Theophrast. kai. Korymbos. quatuor. libri. 2^o*)、それと類似した仕かたで (οὐρανός) 行なわれているのであれば、その場合には明らかに、最善の魂が宇宙全体を配慮していて、そしていま言われたような軌道にそつて、宇宙全体を導いているのだと言わなければなりません。」(Lg. X. 897C4-9)

クレイニアスが同意するのは言うまでもないが、直後に「もし、狂気じみた無秩序な仕かたで行なわれるとすれば、悪しき魂が (X. 897D2) 導いていると指摘されることを考えると、「ヌースの「動」

や回転や思考」といった「知」について問題となっているのは、宇宙の運行として顕れる「動」が秩序的であるか否かであろう。なお、「ティマイオス」との関連でいえば、ここで問題になっているヌースとは、宇宙の規則的な運行の基盤となる「同一」の円環に相当するものであり、「異」の円環に相当するものについては、「法律」第十卷のなかでは言及されていないと考えられる。

続いて、「ヌースの「動」の本質 (ὁὐ κίνησις φύσις Lg. X. 897D3)」を問うにあたって、アテナイからの客人は、ヌースを直接的に考察することの危険性を警告する。

アテナイからの客人「さて、それに答えるにあたっては、わたしたちは死すべき人間の眼をもってヌースを観察し、これを充分に認識する (ὄψασθαι τοὺς ὀφθαλμοὺς) ことができないかのように考えて、いわば真正面から太陽に直接眼を向けて、真昼に夜を招くようなことをしてはなりません。いな、問われているものの似像に眼を向けてこれを見る方が (πρὸς τὴν εἰκόνα τοῦ ἐφαρμυζέουσι βλεπόντας) 、「より安全な道なのです。」 (Lg. X. 897D8-E)

ここで提示されるヌースと似像の峻別は、「ティマイオス」における宇宙論の始まりの箇所 (27D5-29D6) で述べられる、真に実在する領域と生成流転し常なることのない現象の領域との峻別を思い起こさせる。この「似像 (εἰκών)」による考察が意味するものは、「ティマイオス」における「知」と「動」に立ち返って考察する際の重要な論点となるが、まずは先に進むこととしたい。「似像による考察」

が提案されたあと、「ヌースが似ているところの「動」 (Lg. X. 897E4)」として回転運動が取り上げられ、その理由が説明される。

アテナイからの客人「では、これら二つの「動」(二つの場所での「動」と多くの場所を移動する「動」)のうちで、一つの場所であつている「動」の方は、回転している車輪を真似たようなものですか、必ず、ある中心のまわりを (περὶ... τὴν μέσων) つねに動くのでなければなりません。そしてこの「動」が、ヌースの回転運動に (τῆ τοῦ νοῦ περιπέδη) 種族的にも最も近く、性質も似たものなのです。」

クレイニアス「それは、どういう意味でしょうか。」
アテナイからの客人「もしわたしたちが、ヌースも、一つの場所であつて「動」も (νοῦν τῆν τε ἐν εὐα φερομένην κίνησιν) 、「その両方ともを」回転している球の「動」にならざって、それらは規則的で (κατὰ ταῦτά) 、「様な (ὁμοίως) 「動」を、同じ場所であつて (ἐν τῷ αὐτῷ) 、「同じものをめぐって (περὶ τὰ αὐτὰ) 、「同じものに対して (πρὸς τὰ αὐτὰ) 、「一つのロトスと二つの秩序とに従って行なっているのだ」と言うならば、わたしたちは、言葉の上で美しい似像を作ることが下手な者 (φαῖλοι σπληνονοὶ νόησιν κατὰ εἰκόνας) であるというふうに、見られなくてはなりません。」 (Lg. X. 898A3-B3)

直後に、先の引用と逆の性質の「動」はあらゆる種類の「無知 (ἀνοία)」と同族と語られていることを考え合わせると (Lg. X.

883B58)、ヌースという「知」に与っているか無知の状態であるかが、「動」——少なくともヌースの場合は似像として顕れた「動」——が「中心」をめぐる秩序的な回転運動となるか無秩序な「動」となるかと連動していると考えられる。従って、確立された「中心」の有無が、「知」の有無に深く関わっていると解する¹⁷⁾こともできる。しかし、この箇所で見出すべきは、不可視なるヌースの「動」を考察するための似像として提案された、回転という可視的イメージの「動」について、その諸特性が列挙されていることであろう。

以上のように、「法律」第十巻においても、「ティマイオス」と同様に、「動」が秩序的であるかどうか「知」に深く関係するという主張が見出される。では、「法律」第十巻において、「ティマイオス」における「神に似ること」の考察に資する論点は何であろうか。以上の箇所から挙げられる最大の論点は、直接的にはなく似像によつて捉えられるべきものとして、ヌースが論じられていること、つまり、似像としての回転運動を追究することで、元型であるヌースの何たるかについて迫ることができる、という図式が呈示されていることであると考えられる。これは、宇宙の形象として円や球が挙げられていたが、それらが何を意味するかを考察する図式が明示されていなかった「ティマイオス」と幾らか対照的でもある。

従つて、ヌースとその似像という観点からすれば、「中心」をめぐつて回転する「知」がヌースであるわけでも、ヌースが円環の形や球形であるわけでもない。ヌースは魂を導くものであるが、不可視であるヌースのはたらしきの似像は円形あるいは球形の回転運動と

して可視的に表される、ということになる¹⁸⁾。

では、回転運動という似像によつて示唆される、元型としてのヌースとはどのようなものであるうか。基本的には、拙稿は Lee の論考と同じ立場である。まず、「一つの場所で動く運動 (ἴσχυον ἐν ὁμοίῳ κινήσει)」や「同じ場所で (ἐν τῷ αὐτῷ)」からは、直前の 883A3-4 や 883C4-5 から明らかなように「不動の中心」が示唆されており、ヌースの「動」は「中心」——図形的な中心ではなく——を持つものと考えられる。また、「同じものをめぐつて (ἐν ἐνταύτῳ)」からも、「中心」をめぐるといふ似像的イメージがヌースのはたらしきにも想定されうることが示されている。もつとも、ヌースについて「中心」が意味するところは「法律」第十巻では示唆されていないが、後世のプラトニストが「善一者」や「神」を「中心」に想定したことの基礎づけがここから見出されよう。

さらに、「*ἴσχυον*」は詳しく論及していないものの、「ティマイオス」における宇宙の魂についての記述を考慮すれば、回転運動について「同じものに対して (ἴσχυον ταύτῳ)」と述べられる箇所からは、自身で自身に対するヌースの自己同一的なはたらしきのあり方が示唆されているとも考えられる。回転という「動」そのものは直線の「動」とは違って自己に還り戻る性質も持つので、常なるヌースのはたらしき最終なく自身という始点に還り続ける回転運動に表されているといえるからである。つまり、ヌースがなぞらえられる似像としての回転は、「中心」を持つて自己同一的に無限の知的活動を行うものとしてのヌースを象徴していると考えられる。その意味で、似像はヌースの方へと人間を導く媒介の役割を果たしているとも考えら

れる。

結びにかえて

最後に、「ティマイオス」を考察した際に残された疑問が「法律」第十巻を考察に加えることによつてどのように解決されるか、そして、「ティマイオス」の論点と「法律」第十巻の論点を併せることによつて「神に似ること」はどのように理解されるのか検討し、拙稿の結びにかえることとしたい。

まず、(a)として挙げた「動」と「知」の関係についての問題は、似像として可視的に考えられる「動」と、その不可視な元型とヌースの関係として捉えることにより、一定の整理がつくように思われる。似像と元型の関係は、異なった存在の次元を跨つて並行する関係であるから、知の恢復は似像の「動」の矯正として、似像の「動」の矯正は知の恢復として並行していると考えられる。しかし、「知」の混乱した人間が「神に似ること」については、人間が直接的に自らの「知」を恢復することで「動」が矯正されるとは考えにくい。やはり、人間にとつては、平明に真の实在を反映した可視的な「動」という似像の助けを借りて間接的な道を辿ることが、「知」の恢復すなわち「神に似ること」に不可欠なのであり、「昼と夜の観察」に始まる宇宙の模倣の過程として「ティマイオス」において語られているのではないだろうか。この過程において、人間の「知」は、差別的に顕れる似像に対する「可分なもの知」から、その差異性の背後にある統一的な元型に対する「不可分なもの知」へと集束しながら「上昇」していくと考えられる。これは、ヌースの「中心」

として象徴されるものへ、人間の「知」が向かうことといえるかも知れない。

次に、「知」に関していわれる「動」——特に回転運動——が持つ意味である。「法律」第十巻で検討した、宇宙のヌースによる回転運動の意味は、同じく回転するものとして論じられた、「ティマイオス」における宇宙の魂の「動」——とりわけ「同」の回転——にも当てはめることができよう。しかし、「法律」第十巻の論点に従つて、回転の意味はあくまで似像として元型のヌースに適用すべきであり、「ティマイオス」のみから *ἴσως* が解するように、強く字義的に捉えるべきではないであろう。なぜなら、可視的な似像の世界のみにおいて回転運動の意味を捉えるのでは、本来の人間が淵源を持つている不可視の元型の世界を志向することには至らず、「神に似ること」への寄与は考えられないからである。

従つて、「神に似ること」とは、似像としては「中心」を持つて宇宙と同様に無限の知的活動を行うものとするによつて、混乱状態に陥つた人間の魂の神的部分を、正しい回転運動により表される不死性に与らせ、神としての宇宙のあり方に人間ができるかぎり帰一していくことであると考えられる。

注

*プラトンの引用については、ステファヌス版に従つた段落番号と行数で引用箇所を示し、略号とともに本文中に挿入した。

・「ティマイオス」(Timaeus): Tim.

・「法律」(Leyes): Lg.

また、プラトンのギリシア語テキストはバーネット版に、日本語訳は岩波書店版に拠ったが、引用にあたっては適宜改変させていただいた。

- (1) 『哲学・思想論叢』第二十号、二〇〇二年、二二五―二二六頁。
- (2) プラトンにおける「神に似ること」として有名な箇所は「テアイテトス」176B1であろうが、類似の表現は他にも『国家』613B1や『法律』716D2などに見出される。しかし、これらの箇所では「神に似ること」の内容まで明らかに述べられているわけではない。対して、「テアイテトス」では *epitaiōtis deō* という言い回しは登場しないものの、その内容について述べられているため、「神に似ること」という語を用いる。
- (3) 原則として、*replōtos* は「回転軌道」、*kyklos* は「円環」、*teperōdō* は「回転運動」と訳語を区分した。
- (4) 『テアイテトス』では、(a)宇宙・万有を制作するデーミウールゴス、(b)制作された、唯一全体としての宇宙、(c)宇宙の諸天体として制作され、人間の制作を手伝うことになる「子の神々」が「神」として挙げられている。
- (5) *logos* の訳語には理性・知性・叡智などの語があてられるが、*epōnōtis* などの訳語と混乱することを防ぐため、「ヌース」と表記する。なお、「テアイテトス」における人間のヌースについては、魂のうちの「神的なもの(*to theion*)」と言われている場合が多く(*Tim.* 89D6, 90C4 etc.)、ヌースという語が用いられ

るのは少数にとどまる(*Tim.* 71B3)。

- (6) ここで述べられているヌースは、思いなしや所信が属す次元よりも「高い」知の次元を示すものとして、「知識」とともに用いられていると Taylor の見解に従って解したい。この箇所の問題となっているのは、認識作用ではなく、「同」と「異」が関わる認識対象の相違や考えられるからである。A. E. Taylor, *A Commentary on Plato's Timaeus*, Oxford: Clarendon Press, 1928, pp. 182-188 を参照。また、Menn は「ヌースが他の語とともに用いられる理由として、他の対話篇を含めた類例の検討から、同じ「徳(virtue)」が二つの語で捉えられていることを挙げている。確かに、37B3e におけるヌースを「能動作用」ではなく与るべきものとして捉えることは妥当であろうが、与るべき *virtue* という側面をヌースに強調しすぎることには、ヌースの持つ神的側面や指導的性格の看過につながると思われる。S. Menn, *Plato on God as Nous*, Carbondale: Southern Illinois University Press, 1995, pp. 15-17.
- (7) この解釈を採った場合、感覺的事物が「テアイテトス」では「有」に属するものではないという難点もある。
- (8) この箇所については、Zeyl が指摘するように、宇宙の魂を構成する「可分の有」と「不可分の有」それぞれに対応して「可分なもの」と「不可分なもの」が捉えられるのだと考えられる。彼は、「可分なもの」と「不可分なもの」が何を指すかについて、前者を個物として後者をイデアとして解するが、Brisson がまとめてるように諸家の見解は様々である。D. Zeyl (E),

Timaeus, Indianapolis: Hackett Publishing Co., 2000, xli 頁 457
L. Brisson, *Le Mène et l'Autre dans la Structure Ontologique du*
Timéé de Platon, Sankt Augustin: Academia Verlag, 1994, pp.
307-314 を参照。

(9) 「ティマイオス」における人間の魂は、不死のヌースあるこ
はダイモーンである神的魂（頭部）、可死的な氣概的魂（胸部）、
同じく可死的な欲望的魂（腹部）の三つに分けられているが、
「成長と養分の流れ」すなわち血流には、一番目の氣概的魂が
関係している。

(10) これらの語に対する解説は、E. M. Cornford, *Plato's Cosmology*,
London: Routledge & Kegan Paul, 1937, p. 150, Taylor, *op. cit.*,
pp. 273-274 を参照。R. D. Archer-Hind, *The Timaeus of Plato*,
London: McMillan & Co., 1888, p. 152 を参照。また「ティマイ
オス」への言及はないものの、プラトンの各対話篇における密
儀用語について論じたものとして、E. Des Places, "Platon et la
Langue des Mystères", in: *Études Platoniciennes 1929-1979*, Leiden:
E. J. Brill, 1981, pp. 83-98.

(11) 関連して、ヌースに与えることの難しさは、「ヌースに与えるの
は、ただ神々と、人間ではほんの少数者に過ぎないと言わなけ
ればならない (Tim. 51E5-6)」から窺える。

(12) 「神の存在証明」や「魂の存在証明」の詳細については、田
中美知太郎、『プラトンⅡ——哲学(1)——』、岩波書店、一九八
一年、九九—一二三頁や、藤澤令夫、『藤澤令夫著作集2（イ
デアと世界）』、岩波書店、二〇〇〇年、一七二—一七八頁を参

照。

(13) この箇所では、Taylor が指摘するように、「天体の完全に秩序
的な運行のみが取り上げられているからである」。A. E. Taylor,
Plato: The Man and his Work, London: Methuen & Co. Ltd., 1926
(4th ed. 1937), p. 492 を参照。

(14) 「似像」については、「真実とはかけ離れている」と否定的に
見なす姿勢と「真実に近づくよすが」として積極的に受け取る
姿勢がある。特に後者は、上位の存在をシンボライズするも
のとして似像を捉える思想に繋がっていると考えられ、その代
表例として擬ディオニュシオス・アレオパギテスを挙げるこ
とができよう。

(15) 「ティマイオス」の宇宙論の冒頭では (27D5-28D6)「常在の美
在と生成流転するものが対置され、前者が原範型 (παρδειγμα)
で後者が似像という関係にあると論じられる。しかし、「法律」
第十卷では原範型という語は登場しないため、似像に対する「元
のもの」という意味で「元型」という語を用いた。

(16) 「ティマイオス」における宇宙の形象としての球の意味を論じ
た数少ない論者である Morley は、パルメニデス (DK B8, 44)
を援用しながら、33B6 の σφαιδρον(「最も〔自分自身に〕類似
した」)に注目し、「ティマイオス」において宇宙が球体と論じ
られる理由を、「中心からどの方向へも等しい半径」があるこ
とに基づいて論じている。R. J. Morley, "Plato's Choice of the
Sphere", in: *Revue des Études Grecques* 82, 1969, pp. 342-345 を参
照。

(17) 『法律』第十卷においては、モデルとしてのヌースの知的活動は「形 (figure)」ではなく回転の「動・はたらき (activity)」に因つてその力を強調した論考をこぼす。E. N. Lee, "Reason and

Rotation: Circular Movement as the Model of Mind (*Nous*) in the Later Plato", in: W. H. Werkmeister (ed.), *Facets of Plato's Philosophy*, Assen: Van Gorcum, 1976, p. 77.

(81) 898A3-B3 の引用にまこと原文を示した箇所のはらひに基く Lee の解説を参照。Lee, *Ibid.*, pp. 74-76.

(61) 「神に似るいふ」に限るも数少ない論文の一つとして数えられる Sedley の論考であるが、回転運動が単なるメタファーではなく宇宙論的内容の明確な反映とされていることは妥当であるとしても、「神に似ること」への有効性という観点から見た場合彼の主張する字義的な解釈は妥当性を欠くであろう。D. Sedley, "Becoming like god' in the *Timaeus* and Aristotle", in: T. Calvo and L. Brisson (eds.), *Interpreting the Timaeus and Critias*, Sankt Augustin: Academia Verlag, 1997, p. 329.

(三上・ひろこ) 筑波大学大学院哲学・思想研究科)